

病院の理念及び基本方針

基本理念

地域社会から必要とされる医療・介護サービスを適切かつ迅速に提供し、健康の回復を支援する。

基本方針

1. 挨拶と笑顔を大切にし、何人にも誠意をもって接します。
2. 地域の医療ニーズに対して関連機関と連携し幅広く対応します。
3. 説明と同意に基づいた全人類的な医療と介護をチームで実現します。
4. 安心・安全で納得のできる医療を提供します。

病院長挨拶

江田記念病院院長 見上光平

平成 28 年度年報の発行にあたって

平素は江田記念病院にご理解とご協力をいただき大変感謝を申し上げます。当院の平成 28 年度の年報を作成し公開するに当たり一言ご挨拶いたします。年報を作成する大事な目的の一つは、当事者である我々自身が日常の業務を振り返り当院の診療の実態を全般的に正確でかつ簡潔に把握することでありま。またもう一つは当院と協力関係にある医療・介護関連の事業所や行政機関などに当院の実情を知っていただき、良好な関係を構築し今まで以上に多くの関係者の方々に当院を利用していただく事であります。病院の外来、病棟業務は一年を通して日々滞ることなく行われています。各部署において日々の業務を振り返り、さまざまな記録を手間暇かけ統計数値などを算出することにより有用な資料になっていきます。多忙な業務の中ではその目まぐるしさに流され十分な集計や検討ができないおそれがありますが、年報の作成を良き機会と捉えて各診療部門の責任者に執筆を

お願いしました。このような資料を定期的に作成されていることは組織の運営が健全である証左でもあり信頼される病院の基本の一步と考えます。今回の作成に当たっては、当院で過去に発刊された年報や他院の年報を取り寄せ参考にさせて頂きました。立派に製本された年報はマンパワー的にも予算的にも実現が困難であり、無理なく作成できコンパクトな冊子のスタイルにまとめることにしました。ホームページにも掲載し広く公開する予定であります。当院の実情につき多くの方に是非ご高覧頂ければ幸いです。

内科

■診療科活動状況（内科）

1. 診療状況について

当院内科外来の診療体制は、一般外来と専門外来に分かれており、後者には循環器科、糖尿病、消化器科がある。これら専門外来以外の領域は全て一般外来で扱う体制をとっている。また、各種ワクチン接種も対応している。

平成28年度の受診件数は、1カ月合計の件数で620件（同年6月、23.8件/日）から825件（同年10月、33.0件/日）であった。

実施された主たる検査は、採血関連2,660件、レントゲン833件、心電図1,158件、ホルター心電図27件、エコー397件、ABI181件、CT1,250件（他科含）、マイコプラズマ迅速3件、溶連菌抗原2件、インフルエンザ迅速123件、ノロウイルス抗原2件であった。なお内視鏡検査と胃瘻交換は集計に含んでいない。一方治療では、注射45件、点滴510件であった。ワクチン接種はインフルエンザ556件、B型肝炎71件、その他112件であった。

2. 平成28年度に力を入れたこと

どのような疾患や病態にも対応することを原則としている。病診連携、病病連携に努め、当院で対応困難な症例や緊急処置の必要な症例に関しては地域連携室の協力により適切な医療機関へ紹介している。特に緊急性の高い場合には救急搬送の形での急性期病院に速やかな転院を図ってきた。

また院内で対応可能な高齢者の肺炎や脱水、低栄養

状態などは、外来での通院治療や内科療養病棟への短期入院で対応した。また急性期病院から依頼される外来での維持療法にも対応するよう心がけている。

なお医療安全を最優先としリスクの低い検査や治療を心がけるようにし幸い重篤なインシデントの発生は認めなかった。

3. 今後の課題

インフルエンザやノロウイルス、結核等の疑いのある患者の感染対策は十分留意しているが患者自らの申出がないと対応に限界がある。

また診察時に患者氏名を呼び出しており個人情報の保護への工夫が求められる。

待ち時間の問題はしばしば指摘されており効率的なシステムを検討中である。

4. 医員構成

常勤医

見上 光平、東海林 智子、紀 淳子、山本 泰漢

非常勤医

和田 由大、浅野 未希、小林 典之、成田 和穂、

大山 祐司、野口 淳

精神科・心療内科

■診療科活動状況（精神科・心療内科）

1. 診療状況について

平成28年度は4月に帝京大学医学部附属溝口病院から勝村医師が入職されるも、一週間で病休となり、最終的に退職された。そのため精神科急性期治療病棟を引き続き常勤3.5人で運営する状態が続き、入退院やベッドコントロールでは調整に時間がかかったり、外来では初診枠を減らしたりすることとなった。また、前年度末で退職された嶋津非常勤医の担当患者（40～50名が残留）を勝村医師が引き継ぐ予定であったが、勝村医師病休中は青木が代診し、退職後は大倉・佐藤非常勤医に振り分けた。

2. 平成28年度に力を入れたこと

精神科急性期治療病棟では、9月に改修して一年経ち、主に観察室に関して12月に使用マニュアルを作成した。また、窒息を繰り返し亡くなった症例があり、振り返りの集まりを開く、蘇生や看取り／緊急搬送に関するマニュアル作成を続けていく予定。

認知症治療病棟では前年度に続き、感染がらみの問題はなかったものの、歩ける患者の増加に応じて、マンパワー不足やインシデントの増加、それに歩ける患者によるアクシデントのリスクが予想され、安全で安心できる医療の提供には、病棟の手直しが喫緊の課題と考えられる。

また、来年度より高橋医師が精神科急性期治療病棟担当となる予定で、それに伴って指定医で常勤医の伊澤医師を中心とした体制に移行中である。

最後に外来に関して、患者数や初診枠・再診枠を減らすことになったが、新たにストレスチェック制度からくる受診依頼への対応が始まり、初診枠で対応することでいまのところ問題はなさそうである。

3. 今後の課題

- 1) 診療体制の充実を目指し、医師募集を継続する。
- 2) 医療機能評価更新を目標に、マニュアルを整備するなど業務の可視化を図る。

4. 医局構成

常勤医師

氏名	入職	院内委員会	院外嘱託
青木 崇 (H8卒)	平成20年10月	医療安全委員会	ほっとサロン青葉相談医
高橋 洋子 (H15卒)	平成25年4月		区役所物忘れ相談医
武田 恵子 (H20卒)	平成26年4月	行動制限最小化委員会	
伊澤 寛志 (H9卒)	平成27年4月	学会運営対策室	区役所精神科嘱託医
穴見 早友里 (H15卒)	平成27年4月	栄養委員会	田園工芸嘱託医

消化器内科

■ 診療科活動状況（消化器内科）

1. 診療状況について

主に外来、検査、入院を中心に診療している。外来では急性期対応病院ではないため、適時他院との連携をとり緊急入院が必要な患者さんには紹介対応としている。慢性肝疾患や症状の落ち着いた消化管疾患の対応は可能です。検査は主に上部、下部消化管内視鏡検査、腹部超音波検査、CT 検査が施工可能である。入院では全身管理、胃瘻交換、また症状に準じて当院にて可能な処置を行っている。

2. 平成28年度に力を入れたこと

上部、下部消化管検査の検査枠の拡大、また消化管内視鏡およびCT 検査機器の購入を行い、検査精度の向上と患者さんの検査待ち日数の短縮が可能となった。

3. 今後の課題

さらなる検査機器および医療スタッフの充足を鋭意努力したいと思う。

4. 医員構成

山本 泰漢（消化器内科 常勤医）

生末 敏和（消化器内科 非常勤医）

循環器内科

■診療科活動状況（循環器内科）

1. 診療状況について

非侵襲的薬物療法を中心とした循環器疾患の予防、管理を中心に診療をおこなっている。高血圧や心不整脈の薬物療法、冠動脈疾患の薬物療法ならびに動脈硬化進行予防などを主とする。加えて肥厚性心筋症や心不全の治療もおこなっている。昭和大学藤が丘病院との診療連携により、冠動脈造影ステント留置後やペースメーカー装着後症例の外来管理も可能。

特に専門診断並びに治療できる領域

- i) 心電図による不整脈特に心房細動の治療管理。心室肥大並びに虚血性心電図の解釈と治療。
- ii) 高血圧の薬物療法。

早朝高血圧、動揺性高血圧、仮面高血圧の時間薬理学治療。

可能な検査

- 1) 心電図、運動負荷心電図、Holter 心電図
- 2) 心エコー図 3) 頸動脈エコー図 4) ABI

2. 平成28年度に力を入れたこと

常に最新の治療提供を心がけるとともに、循環器関連学会への参加、発表をおこなってきた。患者への病態説明を重視しており、納得できる医療の実践を心がけた。

- 1) T.Tsutsumi, et al. Time-Frequency analysis of the QRS complex: Historical review and future direction. Ann Cardiol Cardiovasc Dis.

2016.(1):1007 open access.

3. 今後の課題

外来患者の数や検査人数が少なく、増やす工夫が必要。

- i) 宣伝を行う。

担当医は元昭和大学藤が丘病院循環器内科准教授として医局員、医学生の指導を行っていた。長年心電図研究に携わり、日本循環器学会座長を連続16年余勤めた。現在日本不整脈心電学会特別会員である。

HP : ttsutsumi07.wixsite.com

また担当医は長年高血圧発症ラットを用いてアンギオテンシン系薬剤の開発とその臨床応用を研究。降圧薬使用において、高度の専門性を有している（疾患モデル動物研究会 役員）。

- ii) 新しい記録機器の導入

担当医は iPhone を介して心電図を転送、解析できる MyBeat(ユニオンツール社)の機器開発顧問をしており、ネット転送できる心電図記録機器の開発に参加している。新たな健康かつ診断機器として利用できる。付記：今年の学会で当院症例の発表を予定している。

- iii) 健診の充実

病院にて新たな患者を発掘するため、積極的に健診を実施する。または二次健診の患者を増やし、検査件数を増やすことが経営戦略として重要と思われる。

4. 医員構成

平成28年度 堤 健（非常勤）

糖尿病内科

■ 診療科活動状況（糖尿病内科）

1. 診療状況について

外来診療を中心に、健診異常として指摘された初回の生活習慣病や他外来でコントロールに難渋している症例の専門加療を行っている。また、他院と連携を取り、教育入院後の定期外来患者の受入れも行っている。

なお、入院中の患者におけるコンサルトにも随時対応を行っている。

2. 平成28年度に力を入れたこと

外来および病棟スタッフと情報を共有し、個々の患者に適した治療、アドバイスを行えるよう心掛けた。また、平成28年度よりスタートした診療科であり、積極的に糖尿病を中心とした患者を受入れることに加え、入院病棟回診での血糖測定や食事・栄養管理、薬物治療の重要性について周知した。

3. 今後の課題

院内使用可能なインスリン製剤や経口血糖降下薬の拡大による患者受入れ体制の充実。

外来でのスムーズなインスリン導入や糖尿病療養指導士の育成、もしくは糖尿病専門スタッフ、チームの構成。

4. 医員構成

平成28年度 松原 史明（非常勤）

皮膚科

■ 診療科活動状況（皮膚科）

1. 診療状況について

皮膚科では、週1回半日の外来診察と、病棟の患者さんの往診診療をさせて頂いております。

外来では、皮脂欠乏性湿疹、足白癬（水虫）、尋常性疣贅（いぼ）、帯状疱疹など **common disease** を中心に治療を行っています。

病棟患者さんをご高齢の方が多く、褥瘡や糖尿病性痒疹などについてご相談を受けることが多いです。内科、精神科の先生方は皮膚に関しても造詣が深く、適切な外用が開始され往診時既に改善していることもあり、有り難いことだと感じています。

2. 平成28年度に力を入れたこと

患者さんと医療経済に優しい診察を心がけております。

3. 今後の課題

病棟の褥瘡数を減らすこと。

皮膚でお困りの際は気軽にお声をかけてください。

4. 医員構成

百瀬葉子

外科

■診療科活動状況（外科）

1. 診療状況について

常勤医は1名。

外来にて外傷、痔、鼠経ヘルニアの用手整復など対応している。

当院では手術は行われていない。手術症例は他院へ紹介（鼠経ヘルニア、急性虫垂炎、など）

2. 平成28年度に力を入れたこと

手術症例は、地域連携を通じ、他院へ紹介した。

3. 今後の課題

近隣の開業医の先生方との連携を強化。

地域連携を通じて円滑な他院への紹介。

4. 医員構成

永原 愛市（外科部長）

整形外科

■診療科活動状況（整形外科）

1. 診療状況について

非常勤医師二名体制で診療を行っている。

外来診療日は月曜日午前、火曜日午後、水曜日午後、木曜日午前で、保存療法（投薬、関節内注入、トリガーポイント注射、リハビリテーションなど）を行っている。手術が必要な症例はIMS 関連病院や近隣大学病院などに紹介し対応している。

入院診療は他科からの依頼に対応している。また精神科疾患を有する外傷患者について他施設より受け入れ、精神科医管理のもと精神科治療とリハビリテーションを行っている。

2. 平成28年度に力を入れたこと

治療範囲が検査機器や採用薬剤により制限があるため、それを補うため長年の臨床経験に基づき、丁寧な疾患の説明、治療方法の説明を行い治療することを心掛けている。

当院にない検査については積極的にIMS 関連施設などに依頼し、対応を図ってきた。

3. 今後の課題

- ・患者数の増加
- ・採用薬・検査機器の充実
- ・外来日の増設

4. 医員構成

藤下 彰彦

杉山 祐加子

リハビリテーション科

■診療科活動状況（リハビリテーション科）

1. 診療状況について

リハビリテーション科は、身体にアプローチする身障部門とメンタルにアプローチする精神部門から構成される。身障部門は、療養病棟・急性期精神科病棟・認知症病棟・通所リハビリテーション・外来と様々な病態や環境で生活される方へリハビリテーションを提供している。精神部門は急性期精神科病棟・認知症病棟・精神科デイ・ケアと精神疾患を有する方に対し、入院から在宅生活までシームレスなリハビリテーションを提供している。当科の特徴として、精神疾患の他に骨折や片麻痺など身体合併症状を有する方へ精神部門の集団的アプローチ、身障部門の個別のアプローチを同時介入することで在宅復帰に向け貢献している。

2. 平成28年度に力を入れたこと

地域包括ケアの必要性が高まる現在、地域生活者の疾病予防に向けた医療知識の伝達が重要と考える。また、その知識は地域生活者同士で伝達され共有されることが肝心である。そこで、地域の公民館やケアセンターに出向き生活習慣病予防のための知識や運動方法の講習会を開催した。講習会では、地域生活者との直接対話により院内では知ることのできない、ニーズや困っていることを知ることができた。その経験を次の講習会に反映させ、参加者の満足度の高い講習会を開催することができた。そして、この取り組みを院内発表会という形式で他部署のスタッフへ紹介するこ

とで、病院として地域貢献の必要性を再認識することができた。

3. 今後の課題

リハビリテーション科の課題として退院後の在宅生活者へのアプローチが不十分であることが挙げられる。在宅生活では、移動時の転倒や服薬管理困難など入院時には想定が難しい事象が発生する。そのことが、再受傷や病気の再発などを招き再入院に繋がるケースが散見される。このことから、退院後の在宅生活を一定期間フォローアップする必要がある。しかし、現状はマンパワー不足やスキルの問題から、思い通りのフォローアップができていない。そこで、特に精神部門のセラピストによる訪問リハビリテーションを充実させるため、メンタル面のみでなく、身体や生活環境改善に対してもアプローチを行えるセラピストの育成が急務である。

4. 医員構成

永原 愛市（リハビリテーション科部長）

健診

■診療科活動状況（健診）

1. 当日の流れから受診結果の返却まで

検診当日は、問診票記載→各検査実施→医師の診察、結果の説明（当日判明分）である。全ての検査データが出揃った時点で担当医が診断結果を記入し、結果報告書は2～3週間後に受診者へ郵送している。また有所見者への二次健診は保険診療の扱いとなり内科外来、循環器内科外来、消化器内科外来等に対応している。

2. 実施状況

平成28年度の年間受診者数は4,037名（男1,790名、女2,247名）であった。契約団体数は80団体以上である。月別受診数で見ると、平成28年度4月、5月はそれぞれ217名、220名であった。7月以降は1カ月350名前後となり、平成29年3月406名であった。この時期的な変動は例年同様の傾向が見られた。

実施している項目および件数は、便潜血1,668件、胃透視974件、胃内視鏡（GF）264件、大腸内視鏡（CF）16件、腹部エコー839件、頸動脈エコー96件、乳腺エコー265件（外部委託）、眼底検査791件、CT検査59件、胸部単純X線2,802件であった。

3. 平成28年度に力を入れたこと

受診者数の増加、契約団体の増加、健診の診断結果の返却の迅速化を目標とした。

4. 今後の課題

利用者への丁寧でわかりやすい説明、正確な診断と質

の均一化、診断エラーのチェックシステムの確立、二次検診の最終結果の確認などを今後の課題とする

5. 医員構成

責任者 見上 光平（院長）

永原 愛市、紀 淳子、東海林 智子、山本 泰漢
非常勤

山崎 忠光、服部 浩一、内山 正信、石田 隆

看護部

◆ 師長会議：看護部

○委員会の目的

看護部門の決定機関として位置づけ、個々の看護単位が相互に連携を図り円滑な看護活動を目的とし、看護部長がこれを主催する。

○委員会の活動内容

1. 病院運営に関する会議（幹部会議等）から看護部門へ指示、提案等を審議し答申

する。

2. 看護部管理運営に関して提案並びに検討を行う。

1) 看護部の目標・方針を検討し企画立案する。

2) 看護業務管理

看護業務に関する計画、調整を行い看護手順、看護基準の評価をすすめる。

3) 教育・研修

院外・院内研修、学会へ参加についての検討。

4) 各委員会との連携を図る

5) 人事管理

昇格に関すること。

配置転換に関すること。

看護要員の欠員時の調整に関すること。

リクルート活動に関すること。

6) 労務管理

職場環境の改善を進める。

職場災害、事故の処理について検討する。

健康、安全・管理を行う。

7) 予算に関する検討を行う

◆ 主任会：看護部

○委員会の目的

看護部門の運営をより具体的に推進するために、共通する問題や各部署における看護業務遂行にかかわる問題を取り扱い、解決に向け活動する。

○委員会の活動内容

1. 看護部の目標・方針を浸透させる。

1) 実施、評価の各段階で問題を抽出し、目標達成するための具体策を検討する。

2) 看護手順の検討。

3) 復職支援研修Ⅰの企画、運営、実施、評価。

4) ラダーⅢ看護師研修の企画、運営、実施、評価。

5) 各病棟で発生する問題で、共通に解決すべき問題の検討。

◆ 介護福祉士会議：看護部

○委員会の目的

介護業務に関する問題提起及び解決をし介護の質を高め専門性を強化する。

○委員会の活動内容

1. 日頃の業務の問題点を把握する。

2. 各部署共通な問題の解決を図る。

3. 他部署における問題点を共有し、問題解決の提案をする。

4. 他部署の業務を理解し、緊急時応援ができるようにする。

5. 看護助手の指導・教育について検討する。

6. 本部介護責任者会議内容の伝達。

◆ 教育委員会

○委員会の目的

看護職員の資質の向上、並びによりよい看護サービスの提供を出来るよう、それぞれの立場と段階に応じて教育的援助を行う。

○委員会の活動内容

1. 学習ニーズと教育ニーズをアセスメントし、当院看護部職員として必要な研修を企画する。
2. 年間教育プログラムを円滑に運営する。
3. 研修評価を行う（研修内容、研修生のレベルアップの可否）。
4. 委員自ら教育力を高められるよう自己研鑽する。
5. 教育担当者、実地指導者と共に新人の指導が効果的に行えるよう援助する。

◆ 記録委員会：看護部

○委員会の目的

看護記録をめぐる課題の明確化と、課題解決への提言及び取り組みを行う。

○委員会の活動内容

1. 看護実践を証明できる記録、継続看護に役立つ記録、チーム医療における情報の共有に役立つ記録となるために看護記録の能率化・統一・充実を図る。
2. 看護記録監査を実施し看護の質の評価を行う。

◆ 業務委員会：看護部

○委員会の目的

看護の専門性や看護の質の向上を図り合わせて、看護業務の効率化、合理化、省略化を図る。

○委員会の活動内容

1. それぞれの日常業務を見直し、看護業務を一般化する事の必要性を認識・実行。
2. 看護内容の水準を高め、業務の効率化を図る。
3. 常に業務が基準どおり安全に配慮し、円滑に行われているか監視する。
4. 関連する部署と連携をとりながら、職場長の協力を得て看護業務遂行に当たる。
5. 看護手順の改訂。
6. 各フロアで使用する衛生材料等の在庫管理と、コスト削減に向けた取組実施。

【看護部（病棟・外来）】

○スタッフ構成（副主任以上の氏名）

1. 看護師：87名

看護部長：櫻井 信子

師長：郡山 紀子・加藤 充恵・菜花 郁恵・
廣野 真理・阪上 友紀

主任：小野 友美・小岩 美笑

副主任：片野 快宏・森岡 佳奈子・篠塚 真樹・
辻 由香

2. 准看護師：14名

3. 介護福祉士：8名

介護主任：中橋 歩

副主任：柳澤 圭子

4. 看護補助者：41名

5. 総数：150名

○看護運営状況

1. 日常生活の援助・診療補助

入浴介助→休日を除く毎日機械浴槽での入浴を介助した（20～30名/日）。

排泄 → 定時のオムツ交換に加え、尿量に応じ

て患者ごとに交換時間をアセスメントして交換。尿量によってパットの適切性も検討。(4階精神科を除く、患者ほぼ全員)今年度は、大王製紙と協働し、患者の安眠を考えた取り組みとして、夜間のオムツ交換回数を減らす取り組みを行った。

食事介助 → アクティビティを高めるために移動可能であれば毎食後と車椅子に移

乗し、デイルームで食事を摂取していただくようにした。食事介助が必要な患者さまには介助を行い、嚥下状況等の確認をしながら ST、栄養士と食事相談し形態の変更も行った。療養病棟・特殊疾患病棟は医療依存度が高い患者様の増加により、経管栄養の患者様が多く見られた。(4~42名)人工呼吸器管理⇒医療依存度が高い患者の増加に伴い、特殊疾患病棟では人工呼吸器装着の患者の受け入れを行い、呼吸管理を行った。(4名/年)

2. 多職種協働

各病棟での多職種合同カンファレンスは定例化し、患者の治療方針の検討や入退院マネジメントの機会として活用されている。

精神科では、訪問看護ステーションと外来・病棟が連携し退院支援・退院後の患者サポートのカンファレンスも行った。

3. 医療安全

各病棟・外来のリーダー看護師が小集団で事故分析(RCA)を行い、病棟にフィードバックし、事

故防止対策に取り組んだ。

4. 感染対策

個人の手指消毒の意識を高めるために、ICTが中心となり手指消毒遵守に向けた取り組みを行った。ラウンドにより注意喚起し、スタッフ意識が向上し遵守率の向上に繋がった。

感染対策委員会の病棟ラウンドでは各病棟の問題を抽出し報告することで、病棟スタッフは改善に向けた取り組みを行い、感染対策意識の向上と実施に繋がった。

5. 離職率低減への取り組み

働きやすい職場環境の構築を目標とし、師長の小集団として活動を行った。

離職を考える時はどのような時かをアンケートし、分析を行い各病棟の離職に対する問題を抽出し、取り組みを行った。

また、看護にやりがいを見出してもらうために、自己の看護を振り返る機会をラダー別で設け、発表会を行った。

離職率は昨年度比+2%で23%であった。今後更なる分析を行い離職防止に取り組む必要がある。

6. 教育

既存のクリニカルラダーに則った教育は例年通り実施できた。精神科領域のラダーも作成し実施した。

屋根瓦方式(ひとつ上のレベルの者がひとつ下のレベルを教育する方法)の教育方法も定着し、ラダーレベルアップ率が上がった。

また、管理者の育成として主任・副主任には師長が講師となり管理研修を行い、師長は講師を行うことで管理に関する学びを深める体制をとった。外部研修への参加として認定看護管理者ファー

ストレベル1名 セカンドレベル1名が受講した。

組みは今後の離職防止の糧になった。

○2016年度目標と実績

1. 目標

- 1) 多職種連携システムの強化を図りスムーズな入退院の調整を行う。
(入退院システムの再構築を行い、入院までに要する期間を前年度マイナス3日とすることで稼働率を95%以上キープする)
- 2) 患者の個別性を捉えた質の高い看護、介護を提供する。
(個別性を捉えた看護を実践することで患者満足度3点以下を15%以下とする)
- 3) 働きやすい職場環境の構築。
(職場環境の整備、及び看護のやりがいを見出すことで職員離職率の低減に繋げる。
常勤看護師・准看護師離職率21%以下。)

2. 実績評価

- 1) 各部署の入院調整方法の見直し、改善は実施したものの待機期間マイナス3日の目標は療養病棟のみの達成となった。ベッド稼動に関しては平均95%であったものの、既存のパスが運用できていないことで退院が滞り、新規入院に繋がらないなどの問題点・課題が明確になった。
- 2) 学集会の開催、看護計画・看護記録の質監査を実施することで、個別性を重視した看護実践の実施に繋げることができた。
- 3) 師長の小集団活動として各部署で「やりがいアンケート」を実施し、職員のやりがい感は何から得られるものかの調査し、やりがい感向上に向けた取り組みをした。結果、離職率は23%で目標達成には至らなかった。しかし、この取り

○学会・研修会等発表実績

1. 教育

- 1) 新人教育：新人オリエンテーション・新人研修・パン横ブロック新人合同研修
- 2) 現任教育：
 - ・院内研修
クリニカルラダー： I…21名 II…39名
III…20名 IV…6名
 - ・院外教育
認定看護管理者ファーストレベル 受講者1名
計5名
認定看護管理者セカンドレベル 受講者1名
計3名
臨地実習指導者 受講者2名 計6名
精神科認定看護師（平成27年度受講）：1名
BLS：2名
フィジカルアセスメントインストラクター：5名
- 3) 院内研究発表
 - 3階病棟
転倒・転落インシデントの減少に向けて
～スタッフの意識調査とインシデント要因の分析～ 田中 暢子
ワークシートを円滑に使用するために 海老名 悠里
 - 4階病棟
クリニカルパス使用の現状調査～使用状況と病棟看護師への意識調査で明らかになったこと～ 鴨志田 愛
精神科クリニカルパスの活用方法に関する研究

～隔離・身体拘束緩和の判断基準としての活用の有効性～

與那城 保香

5階病棟

リスクアセスメントツール使用による褥瘡予防に対する意識～褥瘡予防に対する意識の統一～

佐野 修平

ポジショニングへの意識向上・統一に向けて

～視覚イメージを植え付ける方法を利用して～

村松 怜美

6階病棟

夜間のオムツ交換回数減少による効果

～スタッフへのアンケート調査とインシデント件数との比較～

武藤 真央

体圧測定から見える4時間体交の条件

～リスク軽減を考えた適切なポジショニング～

青木 拓也

外来

アンケート調査による退院前訪問用紙の作成

～退院前訪問により精神科外来継続看護の充実をはかる～

鈴木 保子

4)学会発表

・日本看護学会 慢性期看護

「認知症患者に抱く家族の感情」

3階 田中 暢子(示説)

・日本精神科看護技術協会 神奈川県支部看護研究発表会

「行動制限における患者のストレスについて

～精神科閉鎖病棟入院患者へアンケート調査から見てきた今後の課題～」

佐藤 千華'(口述)

・日本精神科看護技術協会 全国大会

「精神疾患患者を支える家族への援助家族教室を通して」

4階 松尾 佳織(口述)

・第18回神奈川看護学会

「ケースカンファレンスの活性化を目指して～多職種への意識調査か

6階 立入 里紗(口述)

「固定チームナーシングを活用してリーダーを育てる～育成過程での学び～」

3階 加藤 充恵(示説)

・固定チームナーシング第11回関東地方会

「目標達成に向けたチーム会運営から学んだこと

～情報共有に向けたカンファレンスと看護記録の実施～」

外来 二村 梨愛(口述)

・IMS看護学会

「慢性期病院における介護福祉士の役割

～リーダーシップをとるために～」

5階 介護福祉士 中橋 歩

5)院外研修参加数

IMS主催(パン横ブロック・本部)研修

神奈川県看護協会主催研修

日本精神科看護技術協会主催研修

その他研修含め、延べ317名参加

○ 今後の課題と展望

平成28年度は多職種と連携しスムーズな入退院システムの構築に取り組み、各看護単位に求められている患者・家族支援(医療・看護・介護・リハビリ等)の内容を盛り込んだクリニカルパスの作成を行った。しかし、看護部主体での作成となっているため多職種間での取り組みに温度差が生じ、運用に向けて課題が残った。次年度は連携強化を図り、クリニカルパスの運用を活性化させ、更なる経営参画に繋げていきたい。

また、高度慢性期医療の提供においては、より重症

度の高い患者の受け入れが必要であり、看護師・介護者はより深い知識、より優れた技術が必要とされる。患者・家族に満足していただけるサービスが提供できるように看護力を高め、看護の質向上に繋げていきたい。

人事管理では、通年の課題である看護師の離職・定着に向けて職場内環境の見直しと看護へのやりがい感の向上に向け取り組みを行った。師長が中心となりスタッフの意見を吸い上げながら業務改善・カンファレンスの充実、職場の雰囲気作りを行った。前年比で離職率の低減はできなかったがスタッフからは「働きやすい職場だ」といった声は聞かれるようになっている。継続した取り組みが職員の離職防止・定着に繋がることを期待し、更なる働きやすい環境を目指していきたい。